

TV番組作りは漁業と同じだ

NHK 6月放送「里海の四季」担当ディレクター 宮原秀之氏さん

インタビュー・構成：なかじま・みつる



●プロフィール

みやはら・ひでゆき 昭和 53 年 (1978) 東京生まれ。平成 13 年、学習院大卒、同年東京水産大学 (現東京海洋大) 大学院修士 (漁業経済専攻)、平成 15 年同課程終了。同年NHK入局、津放送局に配属。元気のある漁村と海に生きる人々の映像を撮りたいと伊勢湾周辺の漁村取材をすすめ、三重県鳥羽市答志島の漁師一家と島の人々の海に生きる 1 年間の暮らしを、1 時間番組「里海の四季」

として制作。2007年6月17日総合テレビで放映、反響をよぶ (同年9月1日再放送)。現在東京本部制作局に勤務、昼の「ふるさと一番」などを担当。

【リード】6月17日、NHK総合テレビで放送された、1時間番組「特集・里海の四季」は、三重県鳥羽市答志島の漁業と海に暮らす人々の姿を映し出し、とても印象に残りました。鳥羽港と答志港をつなぐ定期航路でおよそ1時間の距離にある答志島。春夏秋冬をつうじて海からの恵みをうけて暮らす答志の人々の日常を、1年間丹念に取材した番組です。同番組制作ディレクターの宮原秀之さんにインタビューする機会があり、氏の番組制作意図や、取材中のエピソード、番組放送後の視聴者から寄せられた反応などについて伺いました。NHK入局まもない「フレッシュ」ディレクターが「海にくらす元気な漁暮らしを視聴者に伝えたい」一心で番組の企画取材に取り組み、「旬」で「鮮度」バツグンな「里海風景」が放送されるまでのお話を



〈写真左〉

答志島の漁風景

(Photo by Miyahara)

伺うことができました。

元気な漁ぐらしを取材したい

——入局まもない“若手”ディレクターが全国放送の1時間枠の番組を担当し、1年間の長期取材したとは大抜擢でしたね。

1年間を同じテーマでチームを作り取材し撮影する番組作りの企画を入局間もない若手が提案しても、まず通ることはないと思っていました。NHKに入った目的は、海と漁業と漁業者の暮らしを取材して番組にしたいという、その一点でした。

津放送局に赴任、伊勢湾の漁村を回りましたが、三重県の漁村はどこも元気があふれていました。そのなかでも、とくに活気がある場所をさがしていて、ふと訪ねた答志島にひき付けられてしまいました。

上司に相談しながら、可能性のある限り提案してきましたが、局内でも、企画意図に同調していただける方がいたので、運良く提案が通り、

撮影場所を「答志島」一本に絞り込んで撮影を開始したのが、昨年の梅雨入りまぢかの頃でした。

——答志島のどこにスポットをあて、どういう番組の内容にしたいと考えたのですか。

私には、答志島の歴史や漁業の民俗や生活習慣などまったく予備知識はありませんでした。島にきて漁師さんと話をしたり、女性たちとも言葉を交わしながら事前取材をただけなのですが、「ここにきめた」という確信めいたものが二つありました。

ひとつは、昔からの風習が、日常の暮らしの中に、今も昔とまったく変わらずに続けられているということです。具体的には、取材を始めてからわかってくるのですが、島の人々は「特別な行事ではない」と、なんでもないように話す言葉に従って、フィルムをまわし始めると、それが、千五百人の島中の人と同時に一箇所の墓地にいっせいに御参りをする、集団墓参りであったりするのです。わたしのように東京でしか生活をしたことのない人間には、びっくりす

ることの連続でした。

もうひとつは、とても若者が多いということでした。これまで、大学院時代に調査にでかけた各地の漁村の中でも、若い漁師さんが漁業現場でがんばっている、特に印象深い漁村、それが答志島でした。

これから、1年間撮影を続けていけば、かならず、すばらしい番組になる、と直感しました。

集団墓参・寝屋子制度って

——1年間のくらしのカレンダーを事前に描いて取材したのではないのですか。

本来は、事前に撮影する内容を構成案として練るのが普通なのですが、今回は、ほとんどぶっつけ本番でいこうと決めました。

春夏秋冬という大きな時間の節目ごとに、島の人々の日々の暮らし自体がもっている、年中行事・祭事のエネルギーを、そのまま、サラリと映像に残すことにしたのです。

——そのあえて“ぶっつけ本番”を選んだことや、ディレクター氏の“若さ”が、素直な感動を生む、鮮度のある番組になったのですね。お盆の画面いっぱい高台から島の全員が同時に墓参りをするカットは、ほんとうにびっくりしました。

取材している本人が一番びっくりしましたよ。

こんなスケールの大きな島びと千五百人総出の墓参りになることは、誰も言いませんでしたし、その場に行ってフィルムをまわし始めて壮観さに気付くのです。

番組主人公役となっていた山田勝久さんは、島でも指折りの名人漁師であり、また、答志島の独特な風習として続いている「ねやおや寝屋子制度」の「ねやおや寝屋子親」です。

島に暮らす男子は全員、中学を卒業した15歳から結婚するまで義理の親をもちます。そして学校や仕事以外の時間を義理の親とともに過ごすのが「寝屋子制度」といいます。その義理の親を「寝屋子親」と呼ばれています。実家の親と、寝屋子親の二人の親を持つわけで、一種の若者宿の答志島バージョンが寝屋子制度です。昔は、実家の食事が終わると毎日寝屋子親の家に来て過ごしたといいますが、最近では、週末の数日になっているようです。

山田さんのほか、島には十数軒の寝屋子親になっている家があります。集団墓参りのとき、山田さんは、これまで面倒をみた「寝屋子」たち全員の家族の墓参りをします。家の親戚たちの墓とともにお墓の中をぐるぐると線香をたいて手を合わせて参るわけです。島中の老若男女の人々が墓参りをして、40軒以上もぐるぐると回りますから、島中がお線香の煙に包まれます。この風景に感動をしてくれた視聴者の方々が多くおられて、「私の故郷でも昔はやっていて、懐かしく思い出した」というお便りを、たくさんいただきました。



島に溢れる海への祈りと感謝

——番組の初めに防波堤で線香をあげて、日の出の太陽に向かって手を合わせる映像が流れます。

お盆があける朝、島の人々は先祖霊を海の彼方（かなた）へ送ります。先祖、そして先祖の住む海に感謝しているのです。この映像こそが、「里海」を象徴するものだ、と確信しました。

（「海に向かって祈る島人」写真）

初めと終わりに二度の海への祈りの場面を瞬間ですがいれました。おばあさんだけではなく、島のすべての人が、日々、このような海への祈りと収穫物をもたらす感謝の気持ちを抱いているのです。

島中に、祈りと感謝の気持ちが溢れているといってもよいでしょう。私のような若造が、素直な気持ちで、普段着のままに、このような場面に接することのできるのが答志島なのです。

わたしが、もうひとりの主人公として、登場していただいたタコ獲り名人の山下善次郎おじいさん。漁師には引退はないと、子供たちにタコの獲りかたや、タコ干しの仕方を、体全部を

〈写真左〉

海に向かって祈る島人

(Photo by Miyahara)

つかって教えながら、みんなが助け合って暮らしていることを理解してもらおうとしているのですね。

——コウナゴを鵜の羽と投石で脅して追い込む「こうなご漁」がとても印象的でした。

1年にそのときだけしかできない漁のひとつです。ひと家族の共同作業で獲るコウナゴですから、こうした伝統漁は、だまっけていても資源を獲りすぎることはないのですね。

山下のおばあさんがリーダーになって、アワビ獲りをする映像がでできます。島の中で神が宿るとされる「コヅクミ（小築海）ジマ」という島周辺のアワビ漁場は1年に1回だけ素潜り漁の解禁になります。八十になる山下のおばあさんが1年待ち望んだアワビ漁です。

普段は、一本釣りでもアワビ素潜り漁もお父さんやおばあさんに技では負けている山下勝久さんの息子さんの尚久さん。彼が誰よりも一番の収穫を上げるのがナマコ漁です。この漁だけはお父さんも息子に技で負けます。山下一家と善次郎じいさんに映像の時間は費やされますが、島の人々全員がむしろ主役なのだと、撮りつけていてつくづく感じました。

係さがしという視点で、日本から世界へ取材を続けるためにがんばろうとおもいます。

(聞き手 中島 満)

各地へ里海取材続けます

なんにもわからない一見（いちげん）さんであつた私たち取材スタッフに島のすべての人が手を差し伸べてくれました。

資源管理の経済モデルの理屈も、民俗学の知識も、水揚げ数量の推移もなにも漁業の具体的なデータを示さなくても、この答志島の漁のサイクルと島の人々の日々の暮らしぶりを、そのまま映し出しさえすれば、なにか、現代に不足している何かを、見てくれた人それぞれに感じてもらえれば、この1年間の取材成果がでたのかなあと、思っています。恥ずかしくてこれまで私などふだん口に出せないでいた、「感謝」のことばも「祈り」の行為も、この島ではごくごく普通に行われています。人と海とのかかわりの言葉「里海」を使おうと考えました。

「里海の四季」というタイトルも、局内ではまだ定着していない「里海」ということばに、だいぶ議論がありました。私としては「人の暮らしと分かちがたく結ばれている海から、漁業であれマリンレジャーであれ、人の暮らしと分かちがたく結ばれた海」という意味として使いました。人の暮らしと分かちがたく結ばれた海に感謝して、そんな海の恵みをうけて暮らす人と海とが密接にかかわりあいのできている場所のことです。

これからも、海に息づく元気な「里海」の関

●エピローグ……タイトルのことを書き忘れました。取材が終わって、印象的な一言を話してくれました。漁業の作業も、テレビの番組作りもどこか似ているんですね。ココダ、というエモノを映像やことばとしてゲットすることは、ただひたすら「待ち」がひつようで、ときには、一日、収穫ナシなんてこともあります。頭じゃなくて歩いて歩いて、汚れまくって汗かいて撮ったネタは、みんなトクダネです。

copyright 2007, manabooks-m. nakajima, & Hideyuki Miyahara & JF-Kyousuiren